

ウィーン・シュトラウス・フェスティバル・オーケストラ  
ニューイヤー・コンサート 2025

Strauss Festival Orchester Wien  
NEW YEAR CONCERT

2025

生誕200年  
ベスト・オブ  
ヨハン・シュトラウスII

200. Geburtstag von  
Johann Strauss II



2025年1月9日(木) 14:00開演 サントリーホール

2:00p.m. Thursday, January 9, 2025 at Suntory Hall

主催: ジャパン・アーツ

後援: オーストリア大使館 / オーストリア文化フォーラム東京

オーストリア文化フォーラム

ウィーン・シュトラウス・フェスティヴァル・オーケストラ  
ニューイヤー・コンサート 2025  
Strauss Festival Orchester Wien  
New Year Concert 2025

指揮&ヴァイオリン: ヴィリー・ビュッヒラー Willy Büchler, Conductor&Violin

ソプラノ: ローレン・アーカート Lauren Urquhart, Soprano ♥

バリトン: アレクサンドル・ブシャ Alexandre Beuchat, Baritone ♦

バレエ・ダンサー: マリー・ブルイユ / ベルナルド・リベイロ Marie Breuilles / Bernard Ribeiro, Ballet dancer ♣

 ベスト・オブ・ヨハン・シュトラウスII   
Best of Johann Strauss II

喜歌劇『こうもり』序曲

Ouverture “Die Fledermaus”

ポルカ・フランセーズ「お気に召すまま」♣

Bitte schön!, Polka française Op.372

ワルツ「春の声」♥

Frühlingsstimmen, Waltzer Op.410

ポルカ・シュネル「観光列車」

Vergnügungszug, Polka schnell Op.281

喜歌劇『ヴェネツィアの一夜』より 第3幕 “ゴンドラの歌” ♦

Gondellied aus “Eine Nacht in Venedig”

ワルツ「皇帝円舞曲」

Kaiser-Walzer Op.437

ポルカ・シュネル「狩り」♣

Auf der Jagd, Polka schnell Op.373

\* \* \* \* \*

ペルシア行進曲

Persischer Marsch Op.289

喜歌劇『ウィーン気質』より 第2幕の二重唱

“どうしても許せないこととは” ♥♦

“Das eine kann ich nicht verzeih'n” Duett aus “Wiener Blut”

喜歌劇『こうもり』より “チャルダッシュ” ♣

Csárdás aus “Die Fledermaus”

ポルカ・シュネル「トリッチ・トラッチ・ポルカ」

Tritsch-Tratsch-Polka, Polka schnell Op.214

ポルカ・フランセーズ「クラップフェンの森にて」

Im Krapfenwaldl, Polka française Op.336

ワルツ「美しく青きドナウ」♣

An der schönen blauen Donau, Waltzer Op.314

ウィーン・シュトラウス・フェスティヴァル・オーケストラ 2025年日本公演

1月 9日(木) 東京 サントリーホール 主催:ジャパン・アーツ ♥♦♣♣

1月10日(金) 豊田 豊田市コンサートホール 主催:(公財)豊田市文化振興財団、豊田市 ♥♦♣♣

1月11日(土) 西宮 兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール 主催:兵庫県、兵庫県立芸術文化センター ♥♦♣♣

1月12日(日) 福島 ふくしん夢の音楽堂 大ホール 主催:ふくしん夢の音楽堂[(公財)福島市振興公社]、福島市 ♥♦♣♣

1月13日(月・祝) 川越 ウェスタ川越 大ホール 主催:指定管理者NeCST(ネクスト) ♠♣♣

♥♦ローレン・アーカート(ソプラノ) & アレクサンドル・ブシャ(バリトン)  
♠錦織健(テノール) ♣マリー・ブルイユ & ベルナルド・リベイロ(バレエ・ダンサー)



### ヴァイリー・ビュッヒラー (指揮&ヴァイオリン)

Willy Büchler, Conductor&Violin

ウィーン・シュトラウス・フェスティヴァル・オーケストラ初の客演指揮者を20年務めた後、現在はベーター・グートと共に音楽監督を務めるビュッヒラーは、ダンスをしているような明るいスタイルで今日まで聴衆を魅了し続けてきた。明るく献身的、情緒豊かでユーモアを湛えた演奏は、彼の音楽作りにおけるたぐい稀なる独自の表現スタイルであり、彼の広範囲にわたる活動経験に基づいている。

ウィーンに生まれ、ウィーン音楽大学でヨゼフ・シーヴォに師事。若干20歳でオーストリアのフォーラルベルク州立音楽院の教授に就任。ウィーンに戻ると、ウィーン放送交響楽団のヴァイオリン副首席奏者を務めると共に、音楽大学で教鞭をとった。

1992年に、ウィーン交響楽団のメンバーで構成されるイオス弦楽四重奏団を創設。この四重奏団のリーダーを務め、コンツェルトハウスで定期演奏会を行う。1995年よりウィーン交響楽団のコンサートマスターを務め、またウィーン放送交響楽団の第1ヴァイオリンの首席奏者も務めた。

ウィーン・シュトラウス・フェスティヴァル・オーケストラではヨハン・シュトラウス時代の伝統を受け継ぎ、“ヴァイオリンを手に”指揮をし、純粋なウィーンの伝統を備えた演奏で、好評を博している。



### ウィーン・シュトラウス・フェスティヴァル・オーケストラ

Strauss Festival Orchester Wien

1978年イタリアでのシュトラウス・フェスティヴァルを機に設立されたオーケストラ。1999年のシュトラウス・イヤーにはウィーン市から「世界に対してウィーン市を代表するオーケストラ」として選ばれている。これを機に2000年1月1日より、ウィーン・コンツェルトハウスでのニューイヤー・コンサートに出演する榮譽を授かり、かつてない大成功を取めている。シュトラウス、レハール等のウィーン音楽には定評があり、美しい音色、ウィーンならではの魅力と喜びに満ちた演奏で聴衆を魅了している。ウィーン音楽の伝統を守り伝えていくという重要な役割を担っており、ヨーロッパでもトップのアンサンブルとして君臨する。

伝統的スタイルと真のウィーン・サウンドに忠実であること、また芸術的に最高レベルの音楽作りがウィーン・シュトラウス・フェスティヴァル・オーケストラの魅力となっている。コンサートでは深い芸術性と共に、ユーモアとエンターテイメントで人気を博している。

世界的に定評のあるヨハン・シュトラウスのスペシャリスト、ベーター・グートと、ウィーン響のコンサートマスターであったヴァイリー・ビュッヒラーが音楽監督を務めている。ヨハン・シュトラウスの伝統を21世紀に受け継ぎ、2人ともヴァイオリンを演奏しながら指揮する。

数え切れない数のコンサートを世界中で行い、日本、中国、台湾、韓国の聴衆にとって最もお気に入りのオーケストラのひとつに数えられている。また、モスクワ、サンクトペテルブルク、キーウといった東欧の大都市へも定期的に演奏に出かけている。また、ケルン・フィルハーモニーホール、ミュンヘンのヘラクレス・ホール、東京のサントリーホール、ソウル・アーツセンター、モスクワの音楽堂、ウィーンの楽友協会等の国際的に最も著名なコンサートホールで演奏を行い、成功を取めている。



ローレン・アーカート (ソプラノ)

Lauren Urquhart, Soprano

アメリカ人のローレン・アーカートは2018年にヨーロッパへ移り、ウィーン・フォルクスオーパー史上最年少メンバーとして採用された2019/20シーズンから、同劇場のソリストとして活躍している。2022/23シーズンには、『ラ・チェネレントラ』のクロリンダ、『ラ・ボエーム』のムゼッタ、『魔笛』のパミーナ、『こうもり』のアデーレ、『フィガロの結婚』のスザンナ、『サウンド・オブ・ミュージック』のマリアなどにデビュー。彼女は、ニュルンベルク国立劇場で初演された『アンナ・ニコル』でシェリー役を演じ、ドイツ・デビューを飾った。ヨーロッパに移ってからは、新曲の歌唱を得意とし、さまざまな初演に参加している。



アレクサンドル・ブシャ (バリトン)

Alexandre Beuchat, Baritone

スイスのバリトン、アレクサンドル・ブシャは2016年にルツェルン音楽院のバルバラ・ロツハー教授のもとで演奏修士号を取得した。2015/16シーズンには、ルツェルン劇場のアンサンブル・メンバーとしてブリテン『アルバート・ヘリング』のゲッジ氏やソンドハイム『スウィーニー・トッド』のアンソニー・ホープ役を務めた。2016年9月より、ウィーン・フォルクスオーパーのアンサンブル・メンバー。2022/23シーズンには、プッチーニ『ラ・ボエーム』のマルチェッロ、モーツァルト『フィガロの結婚』のアルマヴィーヴァ伯爵、レハール『メリー・ウイドウ』のダニロ、そしてモーツァルト『魔笛』の

パパゲーノ役を務める。



マリー・ブルイユ (バレエ・ダンサー)

Marie Breuilles, Ballet dancer

パリ生まれ。パリ国立高等舞踊学校で学んだ後、ボルドー・オペラ座バレエ団に入団。2016年ウィーン国立バレエ団に入団。レパートリーは、スレエフ版『くるみ割り人形』、『ライモンダ』、『白鳥の湖』、バランシンの『ジュエルズ』、『シンフォニー・イン・C』、エレーナ・チェルニシヨワの『ジゼル』、ジョン・クランコの『オネーギン』など。



ベルナルド・リベイロ (バレエ・ダンサー)

Bernard Ribeiro, Ballet dancer

リスボンの国立コンセルバトリー・ダンス・スクール(EDCN)でプロフェッショナル・ダンサー養成コースを修了。2012年にノーザンバレエスクールに入学し、2週間で2年生に進級、2014年7月7日にコースを修了した。

Strauss Festival Orchestra Vienna

**Conductor**  
Willy Büchler

**Concertmaster**  
Shira Epstein

**Violin 1**  
Zsuzsanna Bolimowski  
Cristian Nenescu  
Darko Ljubas  
Andrea Hahn-Bucz  
Ralitsa Angelova

**Violin 2**  
Gordana Jovanovic  
Kazutaka Takahashi

**Viola**  
Taha Abedian  
Weronika Izert

**Cello**  
Philipp Preimesberger

**Double Bass**  
Antal Racz

**Flute**  
Heide Wartha

**Oboe**  
Helene Kenyeri

**Clarinet**  
Markus Adenberger  
Reinhold Brunner

**Bassoon**  
Tonia Solle

**Horn**  
Andrej Kasijan  
Peter Hofmann

**Trumpet**  
Alfred Gaal  
Christian Sauer

**Trombone**  
Florian Senft

**Percussion**  
Wilhelm Schultz



柿沼 唯 (作曲家)  
Yui Kakinuma

今日では誰もが知るワルツという3拍子の舞曲は、現在のチロル州とバイエルン州にあたる地方で13世紀頃から踊られていた農民の踊りを起源とし、それが次第に広まりハプスブルクの宮廷でも踊られるようになったが、国際的な場に初めてワルツが登場したのは1814年、「会議は踊る、されど進まず」で有名なウィーン会議でのことで、これを機に「ウィンナ・ワルツ」として世界中に広まることとなった。

ウィンナ・ワルツの創始者とされるのが、当時ダンス音楽の楽団を率いて活躍していたヨゼフ・ランナー(1801-1843)と、その楽団でヴァイオリンを弾いていたヨハン・シュトラウスI世(1804-1849)の二人である。ヨハン・シュトラウスI世はのちに自身の楽団を率いてヨーロッパ中を演奏旅行し、最後は宮廷舞踏会監督の地位にまで登りつめるという成功を手にした。ヨハン・シュトラウスI世が「ワルツの父」と呼ばれるのは、いずれも音楽家になった3人の息子たち(ヨハン、ヨゼフ、エドゥアルド)のためでもある。中でも長男のヨハン・シュトラウスII世(1825-1899)は父の後を継いでウィンナ・ワルツの全盛時代を築き、「ワルツ王」と讃えられた。次男のヨゼフ(1827-1870)は、兄の影に隠れがちながら多くのワルツやポルカを残し、その詩情に溢れた作風から「舞曲のシューベルト」と呼ばれた。そして末っ子のエドゥアルド(1835-1916)は主に指揮者として活躍し、「美男エディ」の愛称で親しまれた。作品も残したが演奏される機会は少なく、父兄が残した作品を20世紀に伝承することに大きな役割を果たしたといえる。

こうして100年にわたって「音楽の都ウィーン」に君臨した「シュトラウス・ファミリー」の音楽は、今日でもウィーンの人々にこよなく愛され、毎年元日にウィーン楽友協会の大ホール(黄金のホール)で行われる「ウィーン・フィルのニューイヤー・コンサート」はそのシンボルとして常に話題的である。

今回の演奏会では、今年生誕200年を迎えるヨハン・シュトラウスII世のワルツやポルカから選りすぐりの作品が演奏されるとともに、オペレッタ(喜歌劇)の人気曲も演奏される。ウィンナ・オペレッタの魅力は、何と言ってもメロディの宝庫としての数々の魅惑的な歌にある。ほろ苦い恋の味がするこれらの歌はウィーンの人々に愛され、いわゆるウィンナ・リートとしてウィーンの街角で口ずさまれてきたものだ。

## ヨハン・シュトラウスII Johann Strauss II

### 喜歌劇『こうもり』序曲

「ワルツ王」ヨハン・シュトラウスII世のウィーン風オペレッタ(喜歌劇)の最高傑作「こうもり」は、舞踏会に集まる人々が繰り広げる喜劇の中に華やいだウィーン情緒があふれる魅力的な作品。その序曲は、全曲のエッセンスを楽しめる曲としてしばしば演奏会でも取り上げられる人気曲。オペレッタの中のいろいろな曲がポプリ(接続曲)風に続々と登場し、ワルツやポルカのリズムが華やかでうきうきした気分を盛り上げる。途中、鐘が6回鳴るのは、第2幕の最後で舞踏会の終わりを告げる午前6時の鐘である。

### ポルカ・フランセーズ「お気に召すまま」

ボヘミア地方で生まれたといわれる農民の踊り「ポルカ」は、ヨハン・シュトラウスI世によって初めてウィーンの舞踏会場に紹介され、次第に人気を集めていった。当初はゆっくりとしたテンポの「ポルカ・フランセーズ(フランス風ポルカ)」だけだったが、ヨハンII世の時代になると「ポルカ・シュネル(速いポルカ)」も登場し、様々な性格のポルカが生み出されていく。この「お気に召すまま」は、シュトラウスII世が1875年に作曲した喜歌劇「ウィーンのカリオストロ」の劇中曲を編曲した一曲。

### ワルツ「春の声」

「ワルツ王」ヨハン・シュトラウスII世の180曲以上のワルツの中で、おそらく10本の指に入る人気曲であろう。オーケストラ曲としても親しまれているが、もともとはコロラトゥーラ・ソプラノのための声楽ワルツとして作曲されたものだ。シュトラウスはブダペストを訪れた際、F.リストも同席したある晩餐会の席の余興に、即興でこのワルツを作ったと伝えられている。春の訪れの歓びを歌った曲だが、当時30歳年下の未亡人アデーレとの生活をスタートさせ、幸福の絶頂にあった58歳のシュトラウスの若々しい歓びが、そこには映し出されているかのようだ。

### ポルカ・シュネル「観光列車」

19世紀半ばに急速な発展を遂げた鉄道にちなんだ作品で、1854年に開通した世界初の山岳鉄道、ゼンメリング鉄道の勇姿にインスピレーションを得て、10年後の1864年に作曲された。「速いポルカ」のスタイルの中に鉄道旅行の楽しみを謳ったこの曲は、蒸気機関車の汽笛や鐘、笛の音などが登場する愉快な描写音楽となっている。いかにも楽しげな一曲だが、実際にはシュトラウスII世は鉄道旅行をとて怖がっていたと伝えられている。

## 喜歌劇『ヴェネツィアの一夜』より 第3幕 “ Gondola の歌 ”

カーニヴァルに湧くヴェネツィアを舞台に男女が繰り広げるドタバタ喜劇を、シュトラウスⅡ世の音楽はあまりにも美しいメロディで演出する。このアリアは、ヴェネツィアのカーニヴァルを拝察に来た好色のウルビーノ侯爵が歌う一曲。イタリアの明るい陽光の目眩く感覚が、6/8拍子の舟歌のリズムに乗って歌われるのびやかなメロディによく表れている。

## ワルツ 「皇帝円舞曲」

シュトラウスⅡ世の三大ワルツの一つにも数えられる<皇帝円舞曲>は、まさに「皇帝」の名にふさわしい、堂々としたスケールの名作。1888年、シュトラウスⅡ世が64歳の年に作曲され、ベルリンで初演されたと伝えられるこの曲は当初「手に手を取って」というタイトルが付けられていたが、ドイツ帝国皇帝ウィルヘルムⅡ世がオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフⅠ世を表敬訪問した際に、両皇帝の友情の象徴として「皇帝円舞曲」と名付けられたという。行進曲風の導入部に始まり、高らかに歌い上げるワルツはいくつもの副主題へと展開して、豊かな表情と豪華な響きを生み出してゆく。

## ポルカ・シュネル 「狩り」

シュトラウスⅡ世は自作のオペレッタからメロディを採った舞踏会用のワルツやポルカをいくつも作っているが、それは舞踏会で演奏することでオペレッタの宣伝効果をねらったものといわれている。この「狩り」には、<お気に召すまま>と同じく「ウィーンのカリオストロ」に登場するメロディが用いられている。狩りのラッパを模したトランペットとホルンに、鞭や鉄砲まで加わる賑やかな一曲だ。

## ペルシア行進曲

シュトラウスⅡ世には「エジプト行進曲」や「スペイン行進曲」もあるが、いずれも外交行事にちなんで作曲された作品。エキゾチックなメロディが登場するこの<ペルシア行進曲>は、ペルシャの国王、ナーセロッディーン・シャーに捧げられた。

## 喜歌劇『ウィーン気質』より 第2幕の二重唱 “ どうしても許せないこととは ”

オーストリア大公女ギーゼラとバイエルン王子レオポルトの婚礼にあたって催された祝賀舞踏会のために作曲されたワルツ<ウィーン気質>は、初演当時から大成功を取めたため、シュトラウスⅡ世は晩年、この曲を中心に既成曲をオムニバス形式に採り入れたオペレッタ「ウィーン気質」を計画した。今回演奏されるのはその第2幕、ウィーン会議の舞踏会場でロイス・シュライツ・グライツ国大使のツェドラウ伯爵と夫人のガブリエーレによって歌われる一曲。甘美でノスタルジックなメロディは広く親しまれている。

## 喜歌劇『こうもり』より “ Chardasch ”

第2幕で、ハンガリーの貴婦人を装って現れるアイゼンシュタイン夫人ロザリンデが「ふるさとの調べよ、それは私の郷愁を目覚めさせ涙を誘う」と歌う曲として知られているが、ここではオーケストラ編曲版での演奏。ハンガリー・ジプシーの舞曲チャルダッシュのスタイルによる華やかな一曲で、ラッシュ(テンポの遅い導入部)とフリッシュ(シンコペーションのリズムに特徴がある急速な部分)で構成される。

## ポルカ・シュネル 「トリッチ・トラッチ・ポルカ」

「ぺちやくちゃ」という女性のおしゃべりをユーモラスに描いた曲で、軽快なテンポによる人気曲。タイトルは「井戸端会議 Der Tritsch-tratsch」という芝居やそれをもじった雑誌(著名人の噂話を掲載していた)から採られたという説もある。ちなみにシュトラウスⅡ世の妻が飼っていたプードルの名も「トリッチ・トラッチ」だった。

## ポルカ・フランセーズ 「クラップフェンの森にて」

「クラップフェン」とは、ワインの産地として知られるウィーン北部の小高い丘にある地名。カッコウの鳴き声や小鳥のさえずりを交えながら、のどかな田園風景を描いた「遅いポルカ」として広く親しまれているこの一曲、もともとはシュトラウスがロシアを旅した時に作曲したもので、当初は「ハバロフスクの森で」と題されていたという。

## ワルツ 「美しく青きドナウ」

ハンガリー生まれの詩人カール・ベックによるドナウ川とドナウの乙女に寄せる詩に作曲したこの作品は、シュトラウスⅡ世初の声楽曲でもあり、初演のときの評判はさほどではなかったというが、同年のパリ万国博で演奏して以来、「我が家のオームでさえずさむ」ほどの爆発的ヒットとなったという。今日でも、オーストリアの非公式な第2国歌と呼ばれるほどの人気曲であるのは言うまでもない。ウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートでアンコールの定番となっているのはご存知のとおりだ。

## 喜歌劇『ヴェネツィアの一夜』より 第3幕 “ゴンドラの歌”

カーニヴァルに湧くヴェネツィアを舞台に男女が繰り広げるドタバタ喜劇を、シュトラウスⅡ世の音楽はあまりにも美しいメロディで演出する。このアリアは、ヴェネツィアのカーニヴァルを拝察に来た好色のウルビーノ侯爵が歌う一曲。イタリアの明るい陽光の目眩く感覚が、6/8拍子の舟歌のリズムに乗って歌われるのびやかなメロディによく表れている。

## ワルツ「皇帝円舞曲」

シュトラウスⅡ世の三大ワルツの一つにも数えられる<皇帝円舞曲>は、まさに「皇帝」の名にふさわしい、堂々としたスケールの名作。1888年、シュトラウスⅡ世が64歳の年に作曲され、ベルリンで初演されたと伝えられるこの曲は当初「手に手を取って」というタイトルが付けられていたが、ドイツ帝国皇帝ウィルヘルムⅡ世がオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフⅠ世を表敬訪問した際に、両皇帝の友情の象徴として「皇帝円舞曲」と名付けられたという。行進曲風の導入部に始まり、高らかに歌い上げるワルツはいくつもの副主題へと展開して、豊かな表情と豪華な響きを生み出してゆく。

## ポルカ・シュネル「狩り」

シュトラウスⅡ世は自作のオペレッタからメロディを採った舞踏会用のワルツやポルカをいくつも作っているが、それは舞踏会で演奏することでオペレッタの宣伝効果をねらったものといわれている。この「狩り」には、<お気に召すまま>と同じく「ウィーンのカリオストロ」に登場するメロディが用いられている。狩りのラッパを模したトランペットとホルンに、鞭や鉄砲まで加わる賑やかな一曲だ。

## ペルシア行進曲

シュトラウスⅡ世には「エジプト行進曲」や「スペイン行進曲」もあるが、いずれも外交行事にちなんで作曲された作品。エキゾチックなメロディが登場するこの<ペルシア行進曲>は、ペルシャの国王、ナーセロッディーン・シャーに捧げられた。

## 喜歌劇『ウィーン気質』より 第2幕の二重唱 “どうしても許せないこととは”

オーストリア大公女ギーゼラとバイエルン王子レオポルトの婚礼にあたって催された祝賀舞踏会のために作曲されたワルツ<ウィーン気質>は、初演当時から大成功を取めたため、シュトラウスⅡ世は晩年、この曲を中心に既成曲をオムニバス形式に採り入れたオペレッタ「ウィーン気質」を計画した。今回演奏されるのはその第2幕、ウィーン会議の舞踏会場でロイス・シュライツ・グライツ国大使のツェドラウ伯爵と夫人のガブリエーレによって歌われる一曲。甘美でノスタルジックなメロディは広く親しまれている。

## 喜歌劇『こうもり』より “チャルダッシュ”

第2幕で、ハンガリーの貴婦人を装って現れるアイゼンシュタイン夫人ロザリンデが「ふるさとの調べよ、それは私の郷愁を目覚めさせ涙を誘う」と歌う曲として知られているが、ここではオーケストラ編曲版での演奏。ハンガリー・ジプシーの舞曲チャルダッシュのスタイルによる華やかな一曲で、ラッシュ(テンポの遅い導入部)とフリッシュ(シンコペーションのリズムに特徴がある急速な部分)で構成される。

## ポルカ・シュネル「トリッチ・トラッチ・ポルカ」

「ぺちやくちゃ」という女性のおしゃべりをユーモラスに描いた曲で、軽快なテンポによる人気曲。タイトルは「井戸端会議Der Tritsch-tratsch」という芝居やそれをもじった雑誌(著名人の噂話を掲載していた)から採られたという説もある。ちなみにシュトラウスⅡ世の妻が飼っていたプードルの名も「トリッチ・トラッチ」だった。

## ポルカ・フランセーズ「クラップフェンの森にて」

「クラップフェン」とは、ワインの産地として知られるウィーン北部の小高い丘にある地名。カッコウの鳴き声や小鳥のさえずりを交えながら、のどかな田園風景を描いた「遅いポルカ」として広く親しまれているこの一曲、もともとはシュトラウスがロシアを旅した時に作曲したもので、当初は「ハバロフスクの森で」と題されていたという。

## ワルツ「美しく青きドナウ」

ハンガリー生まれの詩人カール・ベックによるドナウ川とドナウの乙女に寄せる詩に作曲したこの作品は、シュトラウスⅡ世初の声楽曲でもあり、初演のときの評判はさほどではなかったというが、同年のパリ万国博で演奏して以来、「我が家のオームでさえずさむ」ほどの爆発的ヒットとなったという。今日でも、オーストリアの非公式な第2国歌と呼ばれるほどの人気曲であるのは言うまでもない。ウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートでアンコールの定番となっているのはご存知のとおりだ。



# ARTIST SUPPORT

【アーティストサポート】へ、多くの皆様からお気持ちをお寄せいただきましたことに、心より感謝申し上げます。

寄せられたご支援は、アーティストの様々な活動に幅広く使わせていただいております。

「人のいるところには夢がある」創業49年来のジャパン・アーツの理念です。  
どんな時代においても、音楽・芸術から生まれる感動は、  
人々に夢・希望・生きる力を与えてくれます。

これまでの活動レポートは、ジャパン・アーツのホームページに  
掲載しておりますので、どうぞご覧ください。

今年も引き続き変わらぬご支援をどうぞよろしくお願い致します。



アーティストサポートの詳細は  
こちらをご覧ください。

## 2024年度ご支援いただいた皆様

### <2024年度 年間サポート>

朝妻幸雄 F.A. 井上豊 岩村和央 上原啓子 上村憲裕 M.U. K.O. S.O. 小田島容子 片山由美子  
H.K. K.K. 栗田美知子 新貝康司 M.S. M.T. R.T. A.D. 田中治郎 F.T. ツールラブ真智子  
ツールラブ真凜 K.N. E.N. 兒子弥生 S.N. 長谷川智子 T.H. 樋口美枝子 M.H. 平山美由紀  
藤野盾臣 松尾芳樹 真野美千代 三木谷晴子 J.M. M.M.  
株式会社青林堂 株式会社セキド 三井住友カード株式会社  
株式会社ソーシャルキャピタルマネジメント 株式会社ロジックアンドエモーション  
ライフプラン株式会社 Heart of the Earth株式会社 きづきアセット株式会社  
(匿名希望 27名)

### <2024年度 福間洸太郎に「花を贈ろう!」>

あかほりみお 厚見有紀 F.A. J.A. 池田惇子 石黒裕康 石崎典子 井住智子 R.I. A.I. 岩塚究 K.U.  
M.E. 猿渡かおり M.E. 大畑篤子 大原志津子 大原みずほ 小山田美代子 カッキー 柿信子 柏香織  
T.K. 川島理絵 駒場雅世 A.K. 桜猫 桜井桂子 佐々木珠乃 佐野孝枝 A.S. N.S. 塩崎勢子 W.S.  
A.S. 新里真美子 進導幸太郎 鈴木志保里 N.S. 早田利江 高島秀子 鷹巣綾子 高田恵子 N.T.  
武田眞子 武田佳美 辻田奈津 土屋麻起 長江雅子 中嶋妙子 Y.N. 中島葉子 S.N. 中村祥子 A.N.  
K.N. 野口由美 H.N. 林順子 平井聖香 平山美由紀 深堀悦代 S.F. 伏見由加 A.H. R.M. K.M.  
三浦祐子 三浦洋子 村田恵美 村山幸恵 山口恵美 依田晴美  
(匿名希望 24名)

### <2024年 ウィーン少年合唱団 オフタイム・サポート>

井口和美 K.K. Rimiko M.H. M.M. 真野美千代 水足久美子 水足秀一郎 ロロコミ・リロコミ  
(匿名希望 12名)

### <2024年 ウィーン少年合唱団 ツアー・サポート>

井口和美 T.O. K.K. Rimiko M.T. 平山美由紀 細沼康子 M.M. 真野美千代 村瀬治男 ロロコミ・リロコミ  
(匿名希望 11名)

2024年12月16日現在 敬称略



ご支援についての詳しい内容は、どうぞ下記へお問い合わせください。

株式会社ジャパン・アーツ アーティストサポート係 Tel.03-3499-7720 (平日11:00~17:00 年末年始を除く)